

I 歴史の舞台となった「上町台地」

1. 「難波長柄豊碕宮(前期難波宮)」と「後期難波宮」

(1) 「難波長柄豊碕宮(前期難波宮)」

- ・大化の改新に伴って、645年に飛鳥板蓋宮から難波の地に遷都した36代・孝徳天皇は、白雉元年(650)から「難波長柄豊碕宮」を造営し、白雉3年(652)に完成した。建物がすべて掘立柱建物から成り、草葺屋根であったとされ、『日本書紀』には「その宮殿の状、彈(コトクニ)諭(イ)ふべからず」と記されており、言葉では言い尽くせないほどの偉容をほこる宮殿であったといわれる。
- しかし、白雉5年(654年)に孝徳帝が没すると、そのあとの齊明天皇は、もとの飛鳥板蓋宮に遷宮したが長柄豊碕宮の宮殿はそのまま残され、天武12年(683)には天武天皇が複都制の詔によって飛鳥とともに難波を都としたが、朱鳥元年(686)正月に全焼した。
- ・北側の区画(東西185m、南北200m以上)は、天皇の住む「内裏」で、前殿(正殿)と後殿が回廊と門で守られており、その南に、前殿(正殿)と後殿を配した「朝堂院」(政治・儀式的場で南北262.8m・東西233.6m)が配されて、内裏南門の左右には「八角殿」が見つまっている。
- ・宮殿の中軸線上には、北から内裏の南門、朝堂院の南門、宮城南面の朱雀門の3つの門が配されていた。
- ・また、内裏と朝堂院の外側(周り)には官衙(カガ=役所)が存在したことが判明している。

(2) 「後期難波宮」

- ・45代・聖武天皇は、平城京の副都として「難波宮」の造営を始め、天平4年(732)頃に礎石建、瓦葺屋根造りの宮殿がおおむね完成した。これを「後期難波宮」と称している。
- しかし、50代・桓武天皇が784年に長岡京へ遷都された際、後期難波宮の大極殿など主たる建物を長岡京に移築された。
- ・前期難波宮と同じく中心に内裏と朝堂院が配され、大極殿と朝堂院は凝灰岩で覆われた基壇の上に礎石を置いて建てられていた。
- ・この2つの難波宮の遺跡は、現在の馬場町・法円坂・大手前4丁目付近に及んでおり、大阪歴史博物館とNHK大阪放送会館の複合施設がある一角もその跡とされている。
- 難波宮跡公園の場所は、明治4年(1871)以降、兵部省(のち陸軍省)の管轄地とされ、昭和20年(1945)の終戦時には歩兵第8連隊が配置されていたが、戦後、この地から鴟尾(シ)や丸瓦が発見され、発掘が進められて遺跡の全容が明らかにされていった。



大阪歴史博物館の「後期難波宮」・復元模型